

喩的用法に関して「ぼやける」が見せる特質、つまり「ぼける」とも「ぼんやりする」とも行動をともにしうることにつながるように思われる。

最後に上で抽出した三語の意味特徴を再掲しておく。

- ぼける： <見る主体の内的原因により、見る対象の映像が明瞭にとらえられなくなる。>
- ぼやける： <見る対象の映像が不明瞭化する>
- ぼんやりする： <見る主体が、内外の原因により見る対象を明瞭にとらえられない状態になる>

<注> 「ぼける」の場合の見る対象の映像の変化の仕方であるが、「近眼」が原因の場合などのように、物の輪郭が不明瞭になるだけのこともあり、また、「麻酔」などの薬物の場合のように、物の輪郭がくずれ、形が変わってしまうこともある。このように、変化の仕方はさまざまである。

言語経歴：1963年1月東京都豊島区生  
(東京都立大学大学院学生)

## 「目標」の意味論

—めがけて・めざして—

井上 優

### 1. はじめに

われわれの行動において、「目標」(TARGET)は様々な場面で様々な意味あいを持って存在する。それに対応して目標を表すための言語形式もさまざまである。本稿では、目標を表す典型的な形式である「～(を)めがけて」「～(を)めざして」(以下「めがけて」「めざして」と略す)をとりあげ、その意味を論ずる。

本論に入る前に、なぜ「めがける」「めざす」という基本形式(終止形)でなく、「めがけて」「めざして」という接続形式(中止形)を考察するのか、その理由を簡単に述べておきたい。

第一に、「めざす」は、「青年は荒野をめざす」「常に完璧をめざす」のように、終止形が現実の発話の中で用いられることがあるが、「めがける」は「めがけて」以外の形は用いられないといってもよい。終止形での比較は、事実上不可能なのである。

第二に、「めがけて」「めざして」は、自立語としての性質が弱まった一種の後置詞的要素とみられる。「～めがけて(めざして)、そして～する」という等位接続、「めがけて」「めざして」の尊敬語化が不自然であることは、このひとつの反映である。

- (1) \*めがけて そして矢を放つ。
- (2) \*オリンピックめざして そして練習に励む。
- (3) \*お嬢様が 的めがけられて 矢を放たれる。
- (4) \*お嬢様が オリンピックめざされて 練習に励まれる。

等位接続、尊敬語化のためには、述語は自立語的でなければならないのである。

第三に、「めがける」「めざす」は、基本的には「動作を行なう前に、何かを目標にすえる」という意味であり、具体的な動作を伴わない。しかし、すえられた目標とそれに対する「動作」との間には、一種の共起制限がある。例えば、「的めがけて矢を射る」「オリンピックめざしてトレーニングに励む」とは言うが、\*「的めざして矢を射る」「\*オリンピックめがけてトレーニングに励む」とは言えない。同様の状況は英語においても見られる。shoot at a bird(鳥めがけてうつ)、start for the country(田舎めざして出発する)とは言うが、\*shoot for a bird, \*start at the countryとは言えない。このような「目標と動作の意味上の共起制限」が形式に反映されることは、多くの言語で見られると考えられるが、日本語の「めがけて」「めざして」も、そのひとつのあらわれといえる。

「めがける」「めざす」の文法における意味あいは、「めがけて」「めざして」という接続形式を考察対象にすることによってより明らかになるのである。

### 2. 「目標」の意味と「めがけて」「めざして」

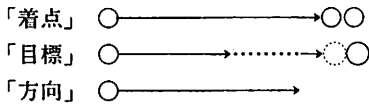
#### 2.1. 「着点」「目標」「方向」

まず、ここでいう「目標」について概略を述べる。

物体の移動(状態変化)には、「移動(変化)するもの」「移動(変化)の起点」「移動(変化)の終点」と

いう三つの要素が想定される(成田1979)。このうち「移動(変化)の終点」については、「着点」「目標」という下位分類が必要である(中右1981参照)。また、「方向」も「移動」を考える際には必要になる。三者の違いを簡単に図式化すると、図1のようになる。

図1



「着点」は「移動物が到達、接触する対象」,「目標」は「移動物が到達、接触しようとする対象」と規定される。しかし、「方向」の規定にそのような「対象」は不要である。図1が意味するのは「着点>目標>方向」という含意関係である。すなわち、「着点」は到達、接触の時点までは「目標」であり、「目標」あるところには必ず「方向」の規定がある。

日本語では、二格名詞句が「着点」「目標」「方向」すべての意味を担うが、どの意味を担うかの決定には、いくつかの要因が関わっている。

(5) リンゴが 地面に 落ちた。

「地面」が「着点」であることは明らかである。次の例ではどうだろうか。

(6) ニュートンが つまづいた拍子に リンゴを 地面に 落とした。

(6)は必ず(5)を含意する。その証拠に、(7)は意味的に矛盾する文である。

(7) \*ニュートンがつまづいた拍子にリンゴを地面に落としたが、リンゴは地面に落ちなかった。よって、(5)(6)ともに「地面」は「着点」としなければならない。

しかし、同じ「落とした」でも(8)は事柄が異なる。

(8) ガリレオが 自説の証明のために 大小二個の鉄の玉を ピサの斜塔の上から 地面に 落とした。

この場合、「地面」は単なる「目標」である可能性がある。その証拠に、(9)は特に矛盾を含む文ではない。

(9) ガリレオが自説の証明のために大小二個の鉄の玉をピサの斜塔の上から落としたが、(誰かが受け取ってしまった) 地面には落ちなかった。

「落とした」は、主体的な「行為」を叙述する場合と、ひとつの事態が成立したという「過程」を叙述する場合とがある。(6)と(8)で、二格名詞句の担う意味に違いが出てくるのはこのためであるが、詳しくは省略する。

一方、「送る」には「落とす」のようなあいまいさは

ない。

(10) ガリレオが ニュートンに 手紙を送った。

(11) ニュートンに ガリレオから 手紙が届いた。

「手紙を送った」ことは、「手紙が届いた」ことを含意しない。実際、(12)は矛盾なく成立する。

(12) ガリレオがニュートンに手紙を送ったが、手紙はニュートンには届かなかった。

「送る」は「目標」を二格にとる述語なのである。

(13) 前に 進む。

(14) 台風が 北北東に 進む。

「前」「北北東」は、基本的に「方向」を表わす名詞であり、「到達、接触しようとする対象」すなわち「目標」は表さない。「進む」も「目標」の存在を特に含意しない述語である。実際、(13)に「目標」がないという状況は十分に考えられる。

(15) 行きつくところはわからぬが、とにかく前に進む。

以上、「着点」「目標」「方向」という区別が必要なこと、また、名詞の意味と述語の意味が、二格名詞句の意味決定に関わっていることを簡単に見た。

## 2.2. 「目標」を表わす「めがけて」「めざして」

2.1.でみたように、二格名詞句は「着点」「目標」「方向」の区別については本質的にあいまいであるが、その一方で「目標」のみを表わす形式も存在する。その典型的な例が、以下で考察する「めがけて」「めざして」である。

(16) 的めがけて矢を放ったが 的に 矢は当たらなかった。

(17) 山頂めざして 歩き続けたが 山頂には着かなかった。

「的めがけて矢を放つ」こと、「山頂めざして歩く」ことは、「矢が的に当たる」こと、「山頂に着く」ことを含意しない。「的」「山頂」は「目標」以上のものではないのである。よって、「めがけて」「めざして」は、行為の結果としての到達、接触を含意する述語とは、基本的に共起できない。

(18) 矢が 的に あたった。

(19) \*矢が 的めがけて あたった。

(20) 列車が 東京駅に 着いた。

(21) \*列車が 東京駅めざして 着いた。

(22) 的の中心に 矢を あてた(命中させた)。

(23) \*的の中心めがけて 矢を あてた(命中させた)。

(24) 壁に ボールを あてた(ぶつけた)。

(25) ?壁めがけて ボールを あてた (ぶつけた)。 「命中させた」の意の「あてた」は「命中した」ことを含意する。実際、「<sup>\*</sup>的の中心に矢をあてたが、矢は<sup>\*</sup>的の中心にあたらなかった」というのは不適格である。しかし、(25)のように、「ぶつけた」の意であれば、不自然さは多少減るようである。「ぶつけた」が「命中させた」よりも単純な行為であることが関与していると見られる(宮島1985参照)が、詳しくは省略する。

「方向」を表わす名詞も、基本的に「めがけて」「めざして」とは共起できない。

(26) \*上めがけて 花火が 上がる。

(27) ?下めがけて ボールを 落とす。

(28) \*前めざして 進む。

(29) ?台風が 北北東めざして 進む。

(27)がそれほど不自然でないのは、「下」を「地面、床」という意味で解釈できる文脈だからである。また、(29)もさほど不自然ではないが、「北北東」という「方角」は「前」と異なり、純粹に「相対的方向」を表す名詞ではないと考えられる。

「めがけて」「めざして」は基本的に「目標」を表わすのだが、名詞と述語の意味によって適格性が微妙に変わってくるのである。このことについては、別の機会に論じたい。

### 3. 「めがけて」「めざして」の分析(1)

「めがけて」「めざして」が用いられる形は次のようにまとめられる。

(30) X めがけて/めざして Yする。

「X」は名詞相当成分であり、「Y」は「Xに対する動作」である。以下では、X、Yをそれぞれ、「めがけて(めざして)の目標」「めがけて(めざして)に共起する動作」という言い方で表し、次の二点から考察を加える。

(i) 「めがけて」「めざして」の目標は何か？

(ii) 「めがけて」「めざして」に共起するのは、どのような動作か？

両者は相互依存の関係にある。目標の性質によって、可能な動作はおのずと制限されるし、なされる動作によって目標の意味あいも変わるからである。

#### 3.1. 「めがけて」「めざして」の目標

言語によって表される事物は、大きく「モノ」「トコロ」「コト」の三つに分けることができる。まずは、「めがけて」「めざして」の目標が「モノ」「トコロ」「コト」である場合について見ていくことにしよう。

「モノ」は、「めがけて」「めざして」の目標となる。ただし、「めざして」が不適格な場合がある。

(31) 松尾が ゴールポストめがけて 突進する。

(32) 松尾が ゴールポストめざして 突進する。

(33) マッチめがけて ファンの女の子が かけてくる。

(34) マッチめざして ファンの女の子が かけてくる。

(35) 長州が 猪木めがけて とびかかる。

(36) \*長州が 猪木めざして とびかかる。

生物の肉体は「モノ」として扱うことができる。(33)は「猪木の肉体」という「モノ」を目標にして「とびかかる」という意味である。

「トコロ」も、「めがけて」「めざして」の目標となる。ただし、「めがけて」が不適格な場合がある。

(37) マラドーナが ゴールめがけて 突進する。

(38) マラドーナが ゴールめざして 突進する。

(39) 都立大学めがけて いん石が落ちてくる。

(40) 都立大学めざして いん石が落ちてくる。

(41) \*京都めがけて 列車が 走る。

(42) 京都めざして 列車が 走る。

しかし、同じ「モノ」「トコロ」でも、「めがけて」と「めざして」では目標としての意味あい全く異なる。詳しくは、4.で述べる。

「モノ」「トコロ」が「めがけて」「めざして」の目標になるのに対し、「コト」は「めざして」の目標にしかない。

(43) \*都立大学めがけて 勉強する。

(44) 都立大学めざして 勉強する。

(45) \*問題の解決めがけて 議論を 重ねる。

(46) 問題の解決めざして 議論を 重ねる。

(47) 本物の味めざして 日夜 研究に とりくむ。

(48) 江川めざして ひたすらボールを投げる。

これらの文における目標は、「都立大学に入る」「問題を解決する」「本物の味を出す」「江川のような投手になる」ことの達成、すなわち「コトの達成」である。人の属性の獲得は「コトの実現」として扱うことができる。「コト」を目標にできるのは、「めざして」の重要な性質である。

#### 3.2. 「動作主」と「移動主体」

「めがけて」「めざして」は、共起する動作の動作主が、同時に移動主体であるかどうかという点で大きな違いを見せる。そのことを、「モノ」「トコロ」を「目標」とする場合を例に見てみよう。

「動作主自身が目標に移動する」動作、すなわち「動作主＝移動主体」の動作は、「めがけて」「めざして」いずれも共起する。

- (49) 松尾が ゴールポストめがけて 突進する。
- (50) 松尾が ゴールポストめざして 突進する。
- (51) 月めがけて ロケットが 飛ぶ。
- (52) 月めざして ロケットが 飛ぶ。

ただし、移動するのが単なる物体で、意志を持つ動作主とはみられない(54)は不自然である。

- (53) 的めがけて 矢が 飛ぶ。
- (54) 的めざして 矢が 飛ぶ。

「めざして」と言う時は、移動物が自らの力で目標に移動していく、という状況を叙述しているのである。この点については、4.2.で述べる。

一方、「動作主が物体を目標に移動させる」動作、すなわち「動作主≠移動主体」の動作は、「めざして」と共起しない。「モノ」が目標の場合に、そのことは明らかである。

- (55) 的めがけて 矢を 射る。
- (56) 的めざして 矢を 射る。
- (57) ゴロをとった原が 中畑めがけて 送球する。
- (58) ゴロをとった原が 中畑めざして 送球する。

「トコロ」を目標とする場合は、「動作主≠移動物」であっても、不自然でないことがある。

- (59) 月めざして ロケットを うちあげた。

しかし(59)は「月への到達」という「コト」を目標に「ロケットをうちあげる」という意味に解釈される。「トコロ」を目標にする場合と、「コト」を目標にする場合というのは基本的には同じもので、そのため(59)は適格なのである。

#### 4. 「めがけて」「めざして」の分析(2)

前節の観察で、「めがけて」「めざして」の最も明確な相違点を見ることができた。すなわち、次の二点である。

- (i) 「コト」は「めざして」の目標にしかならない。
- (ii) 「モノ」を目標とする場合、動作主が移動しない動作は、「めがけて」としか共起しない。

このことの意味あい、後で述べることにして、次に、考察対象を「モノ、トコロを目標として、動作主自身が移動する動作」に限定して、「めがけて」「めざして」の目標、共起する動作の違いを見ることにする。

##### 4.1. 目標に対する「接触」と「到達」

「めがけて」「めざして」の意味を考える上で重要なのは、「接触」(「命中」と「到達」の峻別である。「接触」とは「モノ」に対する「作用」、すなわち、「モノ」に対する「物理的な」働きかけである。それに対し、「到達」は「トコロ」への「移動の完了」であり、「トコロ」に対する物理的な働きかけではない。

- (60) 松尾が ゴールポストめがけて 突進する。
- (61) 松尾が ゴールポストめざして 突進する。

(60)は、「ゴールポスト」にぶつかろうとして突進する、という状況である。つまり、「モノ」としての「松尾の肉体」が「モノ」としての「ゴールポスト」に接触、命中しようとする動作である。それに対し、(61)が叙述しているのは、「ゴールポスト」にぶつかろうとする状況というより、「ゴールポストのあるトコロに到達するために突進する」という状況である。「ゴールポスト」は「得点の入るトコロ」という意味あいではか用いられていないのである。

目標が「トコロ」の場合にも、同様のことが言える。

- (62) プールめがけて 走る。
- (63) プールめざして 走る。

(62)は、まさに「プール」に飛び込みんとして、すなわち「プール」における「モノ」である「水」に「接触」しようとして「走る」という状況が想像されるが、(63)は、「プール」と呼べる「トコロ」(その場合「プールサイド」も含まれる)に「到達」するために「走る」つまり、「めがけて」の目標となるのは、「モノ」としての意味あいを持つものであり、「めざして」の目標となるのは、「トコロ」としての意味あいを持つものであるといえよう。

- (64) 京都めがけて 旅をする。
- (65) 京都めざして 旅をする。
- (66) 京都めがけて ミサイルが飛んでくる。
- (67) 京都めざして ミサイルが飛んでくる。

(64)が不適格なのは、「旅をする」が「京都」という「トコロ」に「到達」するための動作でしかありえないからである。一方、(66)が適格なのは、「京都」における「モノ」すなわち土地、建物に接触、命中し、何らかの影響を及ぼすことができる動作だからである。

「動作主≠移動主体」の場合でも、移動物は「目標」に接触、命中すべく移動している。

- (67) 的めがけて 矢を 射る。
- (68) マラドーナが ゴールめがけて シュートする。

「めがけて」の「目標」は「接触、命中の対象であるモノ」であり、「めざして」の「目標」は「到達の対象

であるところ」なのである。

重要なのは、目標に対して影響を及ぼすのは、「移動物の持つ運動エネルギー」であって、移動物自体の能力ではない、という点である。例えば、「モノ」に接触すると同時に爆発する風船があるとす。確かに、「モノ」に影響は与えるという条件は満たすが、(69)はかなり不自然である。

(69) 風船が ゆっくりと 敵の船めがけて 飛んでいく。

「ゆっくりと飛ぶ風船」が、その運動エネルギーのみで「敵の船」に影響を与えることはないのである。

#### 4.2. 移動の様式

「めがけて」「めざして」の違いは、共起する動作の様式の違いに反映される。すなわち、「めがけて」と共起する動作は、目標に対する「集中的」「単発的」な移動である。運動エネルギーを失わぬためには、動作は「集中的」「単発的」でなくてはならないわけである。一方、「めざして」と共起する動作は、目標に対する「経過的」、場合によっては「段階的」な移動である。すなわち「到達までの経過」としての動作である。

(70) 長州が 猪木めがけて とびかかる。

(71) \*長州が 猪木めざして とびかかる。

(72) プールめがけて とびこむ。

(73) \*プールめざして とびこむ。

(74) \*山頂めがけて 一步一步 ゆっくりと 登る。

(75) 山頂めざして 一步一步 ゆっくりと 登る。

(76) \*飛んでくる矢に悩まされながら 敵陣めがけて 前進する。

(77) 飛んでくる矢に悩まされながら 敵陣めざして 前進する。

(78) 売場めがけて 人ごみを かきわけて 進む。

(79) 売場めざして 人ごみを かきわけて 進む。

「とびかかる」「とびこむ」は、「単発的」な動作により完了する移動である。それに対し、「ゆっくりと登る」という動作は、「経過的」な移動であり、運動エネルギーの蓄積を意図した動作ではない。また、(76)(78)では、「飛んでくる矢」「人ごみ」によって、「単発的」な移動を妨げられているわけである。

移動の経過性は、特定の形式によって表されることがある。

(80) 的めざして 矢が 飛ぶ。

(81) 的めざして 矢が 飛んでいく。

(81)が(80)に比べて自然なのは、「～ていく」によって移動の経過性が強調されているからと考えられる。(こ

こには「視点」も関与するが、詳しくはGで述べる。)

移動の経過性を強調することは、目標が物理的、心理的にある程度遠くにあること(到達までに時間がかかること)を叙述することでもある。「単発的」な動作と共起する「めがけて」には、そのような意味あいはない。

(81) 的めがけて矢がとんでいくが、まだ矢は的に届いていない。

(82) 的めざして矢がとんでいくが、まだ矢は的に届いていない。

「山頂めざして、一步一步ゆっくりと登る」の「山頂」も、物理的、心理的に近くにあるという状況ではない。「飛んでくる矢に悩まされながら、敵陣めざして前進する」「売場めざして、人ごみをかきわけて進む」は、目標になかなか到達できない状況である。つまり、目標は心理的に離れているのである。

心理的に最も離れた目標は、ありかの不明な目標である。

(83) \*出口めがけて 迷路を歩き続けたが なかなか出口が見つからない。

(84) 出口めざして 迷路を歩き続けたが なかなか出口が見つからない。

ありかの不明な目標に対して、「集中的」「単発的」な移動は不可能なのであり、したがって「めがけて」は不適格である。

「ところ」への移動は、正確に言えば、「[ところ a にはいない状況]から[ところ a にいる状況]へ」という状況移行である。「ところ a めざして」と言う時、動作主は「ところ a」にはいない、すなわち、目標となるところとの間には、決定的な隔りがあると捉えられているわけである。目標への「遠さ」はここに由来する。

また、移動の経過性を強調することは、移動物が「経過的」な移動を維持するだけの能力を持つことを叙述することでもある。

(85) 的めざして 矢が 飛ぶ。

(86) 的めざして 矢が 飛んでいく。

(86)では、「矢」が自ら移動するものとして叙述されているのである。

「モノ、ところを目標として、動作主自身が移動する」動作における、「めがけて」「めざして」の特徴は次のようにまとめることができよう。

(i) 「めがけて」が共起する動作は、「モノ」に命中し、それに影響を及ぼそうとする動作である。「動作主=移動物」の動作の場合は、動作主は自らの

体を「接触」の道具としての「モノ」とする。

- (iii) 「めざして」が共起する動作は、「トコロ」に到達しようとする動作である。すなわち、「トコロaにいない状況」から「トコロaにいる状況」への状況移行を目的とした動作である。

## 5. 「コトの実現」

「コトの実現」が「めざして」の目標となることについては、3.1.でみた。「コトの実現」とは、「コトaがない状況」から「コトaがある状況」への移行にほかならない。これは、「トコロ」を目標とする場合の、「トコロaにいない状況」から「トコロaにいる状況」への移行」と本質的に同じ意味あいを持つ。要は、「めざして」に共起するのは、「状況変化のための動作」なのである。「トコロ」を目標とする場合は、「動作主の物理的移動」による状況移行にほかならない。

「コトめがけて」の意味は、「コトにむけて」との比較において明らかになる。

- (87) 日本シリーズにむけて 練習に励む。
- (88) 日本シリーズめざして 練習に励む。
- (89) 金メダルにむけて 練習に励む。
- (90) 金メダルめざして 練習に励む。
- (91) 夏にむけて シェイプアップに励む。
- (92) 夏めざして シェイプアップに励む。

(87)には、「日本シリーズ出場は決まっている」という含みがある。「コトにむけて」は、「コトの到来に照準をあわせて」くらいの意味であり、「コト」が到来することは決まっているのである。「日本シリーズにむけて」は「日本シリーズ開幕に照準をあわせて」という意味で、「日本シリーズ出場の達成」という意味ではない。「コトにむけて」と「状況移行の達成」を目標とする「コトめざして」とでは全く異なる意味を担うのである。(89)が不自然なのは、「金メダルをとるという状況の到来に照準をあわせて」すなわち「金メダルをとることが決まっている」という状況で「練習に励む」という意味になるからである（優勝することがわかっている選手にとっては、(89)は適格かもしれない）。また、(92)が不自然なのは、「夏」すなわち「夏の到来」は、時間の経過とともに実現されるもので、動作主の努力によって達成されるものではないからである。

## 6. 「めがけて」「めざして」と視点

最後に、「めがけて」「めざして」と「視点」との関わりを、「～てくる」「～ていく」との関連で簡単に述べる。

「～てくる」と言う時、話し手の視点は「目標」にある。自分にむかって何かが動いてくるという状況では、何らかの被害意識、すなわち「移動物によって何らかの影響を受ける」という意識が生ずるのはごく自然なことであろう。「～てくる」が動作の経過性を強調するにもかかわらず、「めがけて」と自然に共起するのはこのためである。

- (93) 弁慶めがけて 矢が飛んでくる。

- (94) 崖の下の家めがけて 岩が落ちてくる。

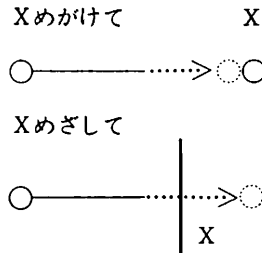
それに対し、「～ていく」と言う時、話し手の視点は「出発点」にある。「移動」とは「出発点」から離れていくことである。その際、視点の置かれている出発点としての「トコロ」とは「別のトコロ」に何かが移動していく、という意識が生ずるのも自然なことである。「めざして」が「～ていく」と自然に共起する理由のひとつはここにある。

## 7. 結論

「めがけて」「めざして」についての以上の考察を次にまとめる。

- (i) 「めがけて」「めざして」は「目標」を示す。
- (ii) 「めがけて」の目標は接触、命中の対象であり、共起する動作は「モノ」に「モノ」を接触、命中させて何らかの影響を及ぼそうとする動作である。
- (iii) 「めざして」の目標は「ある状況から別の状況への移行」であり、共起する動作は、その状況移行を達成するための主体的な動作である。

このことを図に示せば、次のようになろう。



「目標」を表す他の形式との比較については、別の機会に論ずることとする。

<注1> この場合、「ニュートン」は「経験者格」(Experiencer)を担う。主語に経験者格をとる述語には、「やく」「こかす」「こぼす」「かぶる」「ぬらす」などがある。井上1976p.140—146を参照の

こと。

<注2> 「空めがけて 花火をうちあげる」は適格である。この場合、「空」には「接触」の対象となる実体がないようにも思える。しかし、「花火」は「空」で「爆発」するものである。その「爆発」が「空」に対する「接触」として捉えられるのではないかと思われる。

<注3> (78)については、きわめてすばやい移動で

あれば適格であるという意見もある。その場合、移動と同時にすばやく障害を除去しているのである。

言語経歴：1962年 富山県東砺波郡井波町生まれ 0歳～18歳 富山県東砺波郡井波町 18歳～23歳 宮城県仙台市 23歳～24歳 東京都杉並区 24歳～現在 東京都目黒区 (東京都立大学大学院学生)

## やめる・よす・おえる

杉本 武

### 1. はじめに

本稿で取り上げる「やめる」「よす」「おえる」は、国立国語研究所1964では、いずれも「2.150<sub>2</sub> 開始・終了」に分類されており、「行為の終了」を表す。

- (1) 勉強を やめる。
- (2) 勉強を よす。
- (3) 勉強を おえる。

柴田編1979では、このうち「やめる」「よす」は「意味・用法が極めて近 (p.150)」いとされている。その一方で、両語には違いも存在する。

- (4) 会社を やめる。
- (5) 会社を よす。

また、「やめる」「よす」が行為の完結前の終了であるのに対して、「おえる」は、完結後の終了を表す((1)~(3)の意味の違いを参照)。

本稿では、これら三語の意味の違いについて考察を加えたい。その際、「おえる」と関連して、「おわる」についても若干ふれる。

なお、「やめる」「よす」「おえる」は、柴田編1979では、「とめる」「おわる」と共に分析されている。また、森田1977では、「はじまる」の関連語として、「おわる」と共に分析されている。

### 2. 従来の記述

従来、諸辞書においては、「よす」の意味記述として、「やめる」で言い換えているものが多かった(例えば、『岩波国語辞典第三版』『新明解国語辞典第三版』)。あるいは、ほぼ同様の意味記述がなされていた。

ところが、「やめる」について注目されるのは、行為

開始前の中止と開始後の中止とを分けている辞典があることである。

「やめる」①今まで続けてきたことを、そこで打ち切る(ことにする)。よす。②するつもりでいたことをしないうことにする。とりやめる。

『新明解国語辞典第三版』

この他、『日本国語大辞典』でも同様である。これについては、柴田編1979において、「やめる」も「よす」も、開始前の中止と開始後の中止の両方を表すが、両語で preference に違いがあるとしている。

また、『岩波国語辞典第三版』では、次の②のように、「会社をやめる」などといった「辞める」と表記される場合が、同一見出し中で別のランチにされている。

「やめる」①今まで続けていた事を、もう行わなくする。また、しようとしていた事を思いとどまる。[止・已]②官職などから去る。[止・辞・罷]

『岩波国語辞典第三版』

「おえる」については、『岩波国語辞典第三版』に次のような「やめる」を用いた記述がみられる。

「おえる」 その時まで続けていたことを、しとげてやめる。すっかり済んで、または、時期が来て、しまいにする。

### 3. 統語的特徴

#### 3.1. 構文

「やめる」「よす」「おえる」は、いずれもカ格名詞句